

20. 池田町での検死の実際

—豊頃町大津漁港で発見された身元不明者の池田警察署での身元確認業務—

○大熊 一豊, 森 真理*, 小鷲 悠典*

(大熊歯科医院, *北海道医療大学歯学部歯科保存学第一講座)

【目的】現代社会では犯罪や災害が複雑多様化しておりこれに伴う犠牲者の身元の確認が困難な事例も多く、歯科医師にしか行うことのできない口腔内所見による個人識別作業の重要性はますます高まっている。

【症例】平成13年8月に豊頃町大津漁港で身元不明遺体が発見され、池田警察署の霊安室運ばれた。警察では遺体の身元はほぼ確認できているが、遺族に引渡しを行う上での確実な決め手が欲しいということで、遺体のデンタルチャートを作成し、以前に通院していた歯科医院から提供された診療録やX線写真と比較して両者は同一人のものであると判定した。

【結果および考察】今回の事例で決め手になったのは、治療途中の歯が一致したとX線写真が作成したデンタルチャートと矛盾なく一致したことであった。歯科的所見が個人識別に有効な根拠として歯が人体組織中でもっとも硬く、変化しないまま残存する可能性が高いこと、物理的、化学的に安定であることと、遺伝的要素もあり大きさ、色や形、歯並び等は個人特有のものであることがあげられる。さらに、虫歯の有無や歯科治療痕により、口腔内所見が指紋と同様に万人不同であることは

固有性があることがある。また虫歯は国民的疾患であり罹患率が高く歯科の受診率も高いため、カルテやレントゲン写真として治療の記録が残っており、法的な保存期間はあながたかなり歯科医院等に保存されていること、また学校歯科検診があることに加え、今後は事業所検診の必要性も言われているので歯科的所見は記録として具体的に残り記録の保存性が高いことの3つがあげられる。これらは時として指紋よりもその有用性を発揮する。歯科的所見からわかることは、歯の歯髄は硬組織に保護されており血液型・DNA型が判明でき、人種や性別も明らかにできることと、咬耗や磨耗、歯髄腔の狭窄などで年齢が推定できることと、メタルボンドやインプラントなどの高価な補綴物や虫歯の数、治療の程度などによって風俗や習慣、社会的経済状態が判断できることがあげられる。

「法歯学的アプローチは身元不明者の割り出しに非常に有効な手段となりうる」ものであり、歯科医師に与えられたもう1つの新たな役割として担当した症例で明らかにした。

21. 口腔顔面痛・麻痺の患者に対する北海道医療大学歯学部附属病院歯科麻酔科の治療状況および脳波・心拍変動・皮膚温による評価

○河合 拓郎・工藤 勝・大桶 華子・國分 正廣・新家 昇

(北海道医療大学歯学部歯科麻酔学講座)

【目的】口腔顔面痛や三叉神経・顔面神経麻痺などに、当科では星状神経節ブロック療法(局所麻酔剤注射液を患側の第6頸椎横突起上に、前方から注射する交感神経節ブロック、以下SGB)や針・磁気通電療法(以下、ツボ刺激)を適応している。SGB・ツボ刺激後に患者は、顔に「温かさ」を感じ、傾眠状態となる。SGB・ツボ刺激の効果を見極めるために、脳波と心拍変動(以下、自律神経活動、LF)、顔面皮膚表面温(以下、皮膚温)を定量評価した。

【方法】平成14年1月から12月まで、「口腔顔面の痛み・麻痺」を主訴で当科を受診した患者8名(男3名/女5名、年齢:19~82歳)について調査した。治療方法はSGB、ツボ刺激および薬物療法とした。毎回、治療の効

果を確認するため、皮膚温をサーモレーサ(NEC, TH5104R)で測定した。また11月末に治療中の3名の患者を対象に、SGB前後の脳波成分と自律神経活動を脳波・心電リアルタイム解析システム(GMS, MemCalc/Makin)で前向きに観察した。

【結果】患者延べ数は57名(当院歯科患者総数の0.15%)、他歯学部病院の1/10程度であった。経過は、治療2名、継続中2名、他院へ紹介2名、遠隔のため治療断念2名であった。SGBにより脳波は α 波に続き δ 波が増加し、患側皮膚温は5分後に1.1°C上昇した。

【考察】今回の結果から、歯科医師と患者に対する、「口腔顔面の痛み・麻痺の治療法と効果」をピーアールし、潜在する患者を集めなければならない。なお、SGB・ツ

ボ刺激の効果を脳波と自律神経活動・皮膚温で定量評価し、患者の説明に活用したいと考える。

(n = 3, mean ± SE)	対照(SGB前)	SGB 5分後
α波(%)	8.3 ± 2.5	35.7 ± 6.9
δ波(%)	64.9 ± 6.1	30.3 ± 4.6
交感神経活動(LF)	594.6 ± 239.2	551.0 ± 347.8
患側皮膚温(°C)	34.4 ± 0.4	35.5 ± 0.3

22. う蝕診断におけるDIAGNOdent™の応用に関する臨床的研究

—第2報 乳歯と永久歯との比較—

○亀廣 文, 丹下 貴司, 齊藤 正人, 野呂 大輔*, 桜井 有子, 千秋 宜之, 五十嵐清治
(北海道医療大学歯学部小児歯科学講座, *北海道医療大学医療科学センター医科歯科クリニック)

【目的】近年, う蝕予防に対する関心の高まりとともに, う蝕診断法の重要性が増してきている。その中で非破壊的う蝕診断法としてDIAGNOdent (KaVo社)が応用され始めているが, 本装置を用いた乳歯う蝕の診断に関する報告は永久歯に比べ少ない。今回, 我々はDIAGNOdentを応用した乳歯と幼若永久歯のう蝕診断法について検討したので報告する。

【対象及び方法】本学附属病院小児歯科外来を受診した患児(27名)の乳臼歯および幼若永久歯小窩裂溝部を測定部位とした。視診及びエックス線診査により, 健全歯およびC1~C2と臨床的に診断した乳臼歯(59歯)幼若永久歯(39歯)に対し, DIAGNOdentを用いて測定を行った。測定に際し, 患歯をロビンソンブラシで清掃し, 簡易防湿または, ラバーダム防湿下において5回測定し

平均値を求め, 統計学的検討を行った。

【結果】

臨床診断	乳歯	(n)	永久歯	(n)
健全歯	3.86 ± 0.46 ^a	24	4.87 ± 0.81 ^c	16
C 1	19.27 ± 2.99 ^{a,b}	9	21.60 ± 3.33 ^{c,d}	15
C 2	41.14 ± 4.18 ^b	26	54.73 ± 5.01 ^d	8

(平均値 ± 標準偏差)

a~dの同一文字間: 有意差あり (p < 0.05)

【考察】乳歯, 幼若永久歯における, DIAGNOdentの値は, 健全歯, C1, C2共に永久歯でやや高い値を示した。う窩の存在を示すボーダー値は乳歯で16前後, 永久歯では18前後と考えられた。この相違は歯質の厚さや有機質量などが要因として考えられるが, 今後症例数を増やし, さらに詳細に検討すべきと考えられた。

23. ハイブリッド型硬質レジンを用いた臼歯部インレー修復について

○黒田 慎一*, 荊木 裕司*, 尾立 達治*, 柿崎 税**, 松田 浩一*
(*北海道医療大学歯学部歯科保存学第二講座 **北海道医療大学歯学部附属病院技工研修科)

【目的】保存修復学領域において審美性修復材料として代表的なものにコンポジットレジンがあるが, 強度, 耐磨耗性などの点から前歯または臼歯部の比較的小規模な齶蝕に対して用いられている。臼歯部の広範な欠損修復に対しては従来より金属インレーが適応されてきた。しかし近年, 国民の審美性への要求と認識が高まり, 臼歯部においても歯冠色の材料を望むようになり, 材料の開発もさかに行われるようになった。最近, 硬質ハイブリッドコンポジットレジン材料を利用したインレー修復が臼歯部審美修復の選択肢のひとつとして臨床報告がなされは始めている。当講座でも臨床検討をこれまでにおこ

なっているが, 今回はその代表症例を提示するとともに短期の術後経過について報告する。

【症例】本学歯学部附属病院来院患者について臼歯部審美的修復を希望し, 処置の了承が得られたものにハイブリッド材料による間接法インレー修復を行なった(18症例)。窩洞形成は鋳造インレー修復よりも窩洞を深く(約2mm)し, 隅角は鈍化させた。隣接面窩洞はBOX型とし, 窩縁部は咬合面ではバットジョイント, 歯肉側ではショルダーまたはディープシャンファーとした。窩洞形成後通法により印象採得, 作業模型を作製しインレー体を完成させた。使用材料はエステニア, エプリコード(ク